文化三年『花供養』

底本　糸井文庫
校異　弘前石見文庫

花供養

（題簽　表紙）

（表紙見返し）

しばらくは花のうへなると咲花に
つけ、春やむかしの春ならぬ月日のみ
移り行て百とせまりとぞきこゆ。
其たかきこと葉の花はいまもなほ散う
せずして、よきもあしきもみな此下かげ
をたのみつゝ、千草もゝくさいやさかえ
にさかゆなれば、いやおふ月にちぎり
花たてまつる日とさだめけり。年々

（序一才）

歳々花相似と手向草の露所せく
満ぬれば歳々年々人おなじからざる
はし書をしていにしへをあふぐ
双紙とはなし侍るものなり

うつくし松のもと　志宇

文化三年とらの弥生

吹あげるやうに夜明る桜哉　阿年
滝の響をうける鶯　蒼虬
小淋しき春の関屋に米売て　砂童
箸丈の木をそめる丹から　瓠落
雨かたき毒だみ草の葉の戦ぎ　魚舌
橋の上から秋の来る月　岱李

（一才）

稲妻の折／＼背戸の山兀て　玉桐
　露の草履を捨る洗足
耳うとき人を一日責つかひ　在貫
　よほどみじかき長持の捧　恕裕
巵にあられの玉のこぼれけり　布雪
　名もおそろしき神を誓ひて　芦涯
横顔の少ししらめば鳥が啼　宣雅
　海のあちらの田を植に行　仏斎
　　松屋

みちのくは雨のけしきも捨られず　月峰
いのちに倦し旅に寝るなり　玉屑
手のひらの松やに落すものもなく　古塘
御幸の道を作る静さ　鷺泊
北向のちひさき宮に錠をりて　百麿
をきて狂女の蓑を丸げる　凡仲
うち寄て飯くふ上の月と花　葦笠
ひだりの方に霞む辛崎　其白

（二オ）

残る露彼岸の鐘の響くなり　茂良
油ゆたつく十の土器　泉立
年よりが掃除にかゝる瀧の口　千代道
あすの茶の湯の椿切置　斗雪
貧しさは箱の身蓋に物入て　履視
雀の多き藪浪のさと　百池
うつぼ草覚束なげに曇るなり　烏頂
君まつくれのするわざもなし　芝玉

（二ウ）

着心のよくて小袖はよごれたり　梅笛
　鯉の料理をのぞむ椽端　其成
すつくりと落葉の上の筑波山　居然
　御仏負へば足のかたまる　歌雄
二夜三夜月の哀に寝過して　木渓
　るりや頬赤の池水につく　路虫
軽尻に秋風寒く奈良通ひ　芳之
　鈴ふり行は何の　詫（ママ）宣　桃李

（三才）

右一順下略

山ざくら山もかたむく盛り哉　丹波氷上　魯縞
大和路や昼も嬉しき春の月　〃国領　寛枝
かげろふの松ひく人にかゝりけり　〃成松　淇水
一日は疵なき日あり山ざくら　〃園部　其岱
嵯峨山はみな春雨の老木哉　〃大山　武陵

世の花と今はた見せて散さくら　但馬大屋　木徒
朧夜に暮残りたる桜かな　〃夏梅　桂月
夜をかけて鳥も遊ぶや花の中　〃　〃　沙月
人はたゞ浮世なれたり木蓮花　〃幾野　連蛾
川すぢやどの柳より朧月　〃千原　月波
春雨にぬれて歩行や小松原　〃浜坂　四暢
行春のすがたにも似ず藤の花　〃　〃　藍尾
山蜂とねぐらやおなじ花の蝶　〃　〃　方行

（四才）

明の雉子かくれんとして顕はるゝ　　〃温泉村　因山

春さめや松にかちたる草の色　　丹后山田可月堂　芭尺
梅林見えて家ある山路かな　　仝
大ざくら夜中にかゝる盛哉　　〃宮津　鷺八
出家衆は皆出て行て遅ざくら　　〃　桐君
はつ桜ゆふべ烏の啼たはづ　　〃　宣谷
花曇り嵯峨にせり焼く昼時分　　〃　★（まだれに魯）諄
やまぶきに麦搗て居る小家哉　　〃　青馬

梅が香やほつと吹出す鳥の息　呉学改　★（草冠に今）斎
来る人の先しづまりて桜かな　且志
人近ふ見ゆるさくらの梢かな　魚道
はるの山何処に下りても海辺哉　米負
是ほどにけふは桜の散日かな　里人
夕めしの茶碗ならすや藤の花　馬雪
砂原やひとつ落たるあか椿　笛賀
日うらにも咲て桜の盛りかな　馬柳
木の本を出ればさくらの月夜哉　三省

（五才）

あながちに夕栄するやあか椿　　捜古
山陰はさくらもひろき月夜哉　　素鱗
しよんぼりと鷺は濡けり春の雨　　魚光
井の水のつる／＼として梨の花　　武節
藤の花空にさはらぬさかり哉　　青湖
鯛の直のおつるほどちる桜かな　　馬良
乞食の世界は広し春の草　　山巴
野すゞめの囀高し朝ざくら　　鳳吹
きのふから松かたづいて汐干潟　　巍道

花のちる水いたゞいてなく蛙　〃　兎郷
朝起や草の二月は鳥の声　〃　桃十
水鳥の水にもぬれずはるの雪　〃　鼎二
諸鳥や何を便りに雲に入　〃　渭柳
夜のさくら己があかりに散にけり　〃　蕭谷
梅にならぶ隣の桐はふとりけり　〃　羽三
うり残す雛そのまゝの節句哉　〃　香圭
巵のはや涼しうてもゝの花　〃　蛙吹
風折／＼水にもつかず藤の花　〃　巴久

（六才）

何につけかにつけ春の夜雨哉　〃　漱石
山吹やきゝ覚えたる人の音　〃　加悦　絲英
三日月を桜に置てもどりけり　〃　后野　舎琴
はる寒に日の永ふなる沙汰もなし　〃　田辺　草稿
春の日の家のうちから暮にけり　〃　似藻
長き日や鶯も来る石の上　〃　岩屋　素柳
夕ぐれや雲置なをす花のうへ　〃　石川　里笛

三日月にきはめがたさよ春の宵　因幡岩井　如竹

桜見て居れば人あるうしろかな　蘭友
青柳の木の間しづまる嵐かな　鼎
腹からの寒さでもなしはるの雪　不説
鶏が夫婦かすむよ門の山　越山
ながき日を親子と見えて畑うちぬ　雷師
日の当る苞提て行春辺かな　泰山
草の戸はすみれに近き月夜哉　大調
はるの水けふも野末の雲に入　古居
むつまじう桜や人や夕くれぬ　月村

（七才）

やぶ入や霞がくれの里に入　大壺
山寺の鐘や霞のうしろより　飛父
けふも亦入相きゝぬ宿の梅　三籟
夕蛙おのが世界を流れけり　市隠
春の海見返す里は暮にけり　至三
くるゝやら柳に響く鐘の声　大素
雨ふらぬ夜は月になく蛙かな　守口
鶯の声旅ならぬこゝろかな　慰月
夢覚て見れば蛙の声の中　守中

春もやゝ長閑になれば落椿　一渓
明近くふる松明にかへる雁　〃　少年　一方
初午や夜更て深き門の月　〃　瓦人
初午に忘れて居たり杉の月　〃　大蕪

途中から袴戻して花見哉　伯耆米子暁山軒　春紫
春をしむ人の植しか遅ざくら　〃　三崎　碩遊
朧月花の曇のあまりてか　〃　湖水
初蝶や日和になりてけふ二日　〃　宇野浦　六子

（八才）

おそざくら是はと休ふ旅路かな　丶　二翠
咲満て花のうぐひす見えぬ哉　丶倉吉連　暁雄
おもふ夜の只明るなり春の雨　丶　楚嵩
中／＼に雨降花の盛り哉　丶　梅川
五位鷺の付て行ぬや帰雁　丶　蘭交
でゝ虫の角ふりわける柳哉　丶　仮中
ふい／＼と蝶出る也草の庵　丶　呉雲
百千鳥来ずなる松の光り哉　丶　芦錐
とつおひつ並べ直すやけふの雛　丶　可来

しぐるゝと見ゆれ霞の東山　　箕嵐
藪入やそよ／＼寒きうめの花　　月里
むづかしき枝面白や梅の花　　豊衣
蝶に手を引れて老もうかれけり　　翠月
三味線のぞめきに蝶もかたよりぬ　　眠月
さびしさの端を見せたる桜哉　　徐来
夕暮や只二三尺の上ゲひばり　　蘭玉
来てからは桜の噂止にけり　　湖眼
皆人のこゝろほどける柳哉　　貫龍

、浜大谷
、梶原
、所子
、今津
、日吉津
、川岡
、大谷
、米子

（九才）

燕や旅して見れば旅にまで　〃　千家
梅二輪それだけの春得たりけり　〃　和月

春なれや海にも波の花曇り　出雲大社日々庵　浦安
水かれて山吹高く咲にけり　〃　白沢園
毎日のさくらに痩る法師哉　〃　有風
姥捨やさくらにかゝる宵の雲　〃　呂竹
くれて行春を川辺に啼蛙　〃　扇風
花に宿とるとは歌のこゝろかや　〃神門知井宮　里蝶

引直す虹のけしきや夕ざくら　一釣
薄雲の一重を出たり山ざくら　其風
白藤や雨の雫の寒からで　春蒲
網の目を散るぞ小鮎に初桜　飛鳩
人恋し夕山ざくらちり初る　龍池
捨がたき山や桜の一木より　波涛
山ざくらよふも揃ひし老の皺　魚村
雉の声淀の魚市みゆるなり　燕子
我門やけしきをよせる梅の花　松子

（一〇オ）

うごき出す草の中より鳳巾　　鶴寿
月のある柳折んとおもひけり　　〃　梅月
桜咲揃へば山の低ふなる　　〃　古志　露光
花をしむよるの雨気にかゝりけり　　〃　芝及
我花を捨て出歩行ひとり哉　　〃　東廬
春風の宿を見せうぞ柳陰　　〃　吾友
遠ざかる梅の朧を出るつき　　〃　九鶴
漣に朝夕ありてさくら哉　　〃　三千丈
のどかさを夜にうつして花見哉　　〃　澄水

雪の後峰にかたまるさくら哉　〃　渡舟
青柳のかるふ吹出す小家かな　〃　古志町
咲あげて花屋の損や春の雨　〃　牡若
売に出る花にのりたる胡蝶哉　〃　李郷
うつろひし彼岸桜や庵の庭　〃　和風
野心も空より出来て初雲雀　〃　魯山
草餅に影をうつして三日の月　〃　芦舟
　八雲山のふもとにて　〃　溜水
白雲の巣にそだちたる桜哉　〃　橘隠
野遊や雉子の尾につく日の光　〃　花叔
　　文節

一本のさくらにこづむ藁家哉　〃神在　三都良
月深き夜頃や春のあり所　〃　百丈
八重ざくらむかしぶりにも咲にけり　〃　玉沽
梅が香を梅檀の葉にとめにけり　〃二部　里石
花ちりて水の白さや春の川　〃久村　一種
谷底も弥生が来てや花に風　〃　如竹
若菜摘宵やむかしの月がある　〃　露竹
さゞ波や思ひをよする桜貝　〃　保水
向直る梢の鳥や春の月　〃　紫翠

松杉の陰はくれてもさくら哉　小田　其泉
里はまだしらぬ夜明や山桜　〃馬木　古吹
若草や波間も春の島ひとつ　〃　基丁
袂から小貝のもるゝ汐干哉　〃　柳枝
誰問む花にかけたる谷の橋　稗原　一声
吹おろす風に花あり春の山　〃　よの女
梅ちるや谷の流れも花筏　〃　しほ女
鶏よりも夜明の早し山ざくら　〃　池月
さゝやきも花の鳥のと花の友　〃　都水

（一二オ）

野にもはや品の付てや梅の花　石見大田　其由
花鳥の空にならぶや鳳巾　〃河本　暁廬

水にある豆腐に春のあらし哉　豊前小倉　十邑
一に富士二は何／＼ぞ山ざくら　〃　桑雨
ゆるされし祖師こそ花よ酒肴　〃　歓甫
面白やさくらに渡す山かづら　〃　久木
山ざくら西亞魯（ヲロシヤ）は何と見ていにし　〃　黙雷

前載（ママ）に見知た蛙啼出しぬ　丶黒崎　青人

顔ばかり夜明る人や山ざくら　豊後高野　魚舌
山かげや七つ過れば花のちる　丶日田　有篁
朧夜となりぬ橿の木柏の木　丶　葵亭
暮かねて水のはし／〻丶のどかなり　丶カツラ川　春波

白魚や花ちり流すおり／丶に　筑前山鹿　瑞芝
香を配る世話で一重か梅の花　丶姪浜　魯二

（一三才）

ある山寺にまかりひめもす
かゝるをりにふれて

けふばかり夕暮もちらぬ桜哉　丶直方　此原
山ざくら吹ちる水に留るかな　丶　桃雫
狩人の桜にながき羽織かな　丶　寄木
青天や是ぞ誠の花ならん　丶　曙川
日おもてや松のはづれの初桜　丶　柳左
散さくら座禅の僧の心しれ　丶　藤曲
夜ざくらや烏うか／＼雲に啼　丶　涼眉
動くぞと見えぬる花のかろみ哉　丶　南交

（一三ウ）

花に鳥とぞ見るうちに日和かな　　文花
横雲の気色も見たし花盛　　求古
我留主にさくらの花の散にけり　　壺青
それ／〻＼に目のきはまらぬ花見哉　　晩翠
来る人も花守となる花の陰　　白芳
あさ風や雲はなれ行峰の花　　たき女
花の上くれぬうちから月やある　　橋雨
むつ田よりさし登る日や花の雲　　歌舌
花に鳥雲に入べく見えにけり　　楓里

（一四オ）

花盛鳥消る枝もなかりけり　　五雪
鶯ののぞひて歩行小松かな　　朝可
夕暮を門へもてきて啼蛙　　井美
朝霞嬉しき橋のかゝりけり　　希玉
松の隙を苗代水の曇り哉　　撫節
雲雀から引延さるゝ烟かな　　白志
夕ざくら処によれば火のほしき　　此柱
とかくして月は満たり花盛り　　沙牧
山人の藤もて戻るゆふべかな　　泉左

、
、博多
、
、芦屋
、芦江
、
、吉木
、直方
、竹丸

夜は夜とて桜のうへの噂かな　　、石中庵　一萍
山はみな畠にするか春の風　　、甘木　帰来

船つなぐ桜持けり須磨の海士　　筑後恵和村　鉄舟
有明のかくるゝ花のあらしかな　　、蔵八　其成
正月や何につけても月と花　　、久留米　一簀
古きもの流れつくせり春の水　　、　方朗
のび上る磯菜や雁の別れより　　、　芦月
月になる迄の宵なり春の山　　、　双烏

（一五才）

心ほど散ものありて山ざくら　　方舟
正月は何があろふとうめの月　　冠山
花にひとり春の夜ごゝろ尽しけり　　芦月
花ちつと散出す夜から啼蛙　　文角
みち汐に月夜桜の匂ひけり　　羨乎
けふの日も暮そこなはず啼蛙　　春喬
定らぬ風の吹なり梅のもと　　梅路
夕空の小雨あつまる柳かな　　井甫
まづ風を押へて花のさかり哉　　五鹿

（一五ウ）

永き日や汐に引るゝ水の筋　玉芝
野に走る駒の頭や立ひばり　太皐
鶯を跡になしけり丘の松　青鱗
啼蛙やどの寝いびき夜更たり　二桃
朝雲のかすりて行や梅の花　梅芽
鶯のたゞ飛ぶかと気づかはし　李薫
花よりも多し御室の人の数　洵美
すむ水に影もとまらぬ燕かな　如松
松風を放れ切たる汐干哉　士口

（一六才）

のどかさや川原に落す鳶の声　丶　三省
白梅に夜降ものゝ雫かな　丶　吾友
いつ来ても夜明のやうな桜哉　丶　其映
春の雁おぼつかなさを啼夜哉　丶　菊也
夕風に吹起されて藤の花　丶　紫渓
入月のさくらにさはぐ小鳥哉　丶　芦江
風もなし爰を心の夕ざくら　丶　李渓
年々の桜にくるゝ藁家哉　丶　友之
堰水に春はみちけり啼蛙　丶　輝友

日の影も草に落こむ雲雀哉　　〃　烏孝
散花にまぶれて見ばや此朝気　　〃　松陵
夜の明て見ればひとつの蛙哉　　〃　登龍
大嶽をおろして来たり花の鳥　　〃　祥禾
平押にくれて行なり遅ざくら　　〃　米虫
月の夜も雪の夜もあり猫の恋　　〃大村
風止で朧をつゝむやなぎかな　　〃　微山
　　〃島原　鐘山

南無庵のほとりはみな
西行の花と聞えければ

（一七オ）

夜桜と呼れて咎を散しけり　菊也
　されば久しき山吹の軒　馬印
人／＼の箸取たびに雉子啼て　大峨
　旅の調度のあさき在明　士勲
狩衣に秋の匂ひを打かさね　蘇十
　ひさごほしやとたゝく板ぎれ　松涛
祖父婆々は牛のいろけにうつゝなく　祥禾
　風の跡から恋をしかける　天外
世の中を梔の花と思ひしに　印

、長崎

くる／＼とまく四五枚の紙　也
賓頭盧をどつさり下す椽の先　勲
　なには堀江の船の長冬　峨
あぢむらの羽音に月の曇りかけ　涛
　兜かゝえて古き名をいふ　禾
豆を煮る心のうちぞ哀なる　外
　きれいに明し山の中ほど　印
木々はみな花の嵐にかたぶきて　十
　蝶舞出よ蛙音をなけ　勲

（一八才）

けふまでの彼岸の水を汲並べ　鞍風
　さびしき時にたゝむからかさ　竹人
山繭をみのゝ男の売に来て　也

すたり／＼けふも氷柱の雫哉　士勲
行先は樹あり家あり啼蛙　大峨
鶯やうしろを見れば山の月　天外
落馬しておかしき萩の若葉哉　蘇十
春深く木の下つゝじ咲にけり　松涛

（一八ウ）

若草を四五日踏で都かな　竹麿
春風に付て来るなり川原鶸　馬印

在長崎

初ざくら家の古さに散にけり　肥後熊本吾斉改　砂童
水草のわづかな夜にも啼蛙　〃　百児
声高ふ笑ふ人なし花のもと　〃天草　女　芝玉

家ありて桜なき岡はなかりけり　〃熊本　眠石
散る花にはや陰もある深山哉　〃　羽人

（一九才）

たよる木もわからぬ藤の盛り哉　丶　敞裘
花の山終にはあすの曇りかな　丶　貫露
日を跡になして夕山ざくら哉　丶　虹夕
うつかりと舟着磯のさくら哉　丶　二扇
梅咲て山陰濁るながれかな　丶　岨邑
只ひとり見ては置れぬ初桜　丶　蘭雫
梨の花昼の姿の残りけり　丶　尺嵐
人声のかつ／＼暮て花の山　丶　松角
麓には牛の声あり雨の花　丶　蓼雨

（一九ウ）

菫咲野にはとゞかず鐘の声　秋烏
ちる花の雨に捨たる箒かな　車来
流れ来る物にさはりて柳鮠　文橋
空木の一本たてり花の中　蟻城
我裏につゞく野末の桜かな　雲岱
入相の上に遠山ざくら哉　露好
山ひとつつゝじの物と成にけり　恕風
山ざくら人をしらべて戻るなり　緑川
花ありや飛／＼あかき夜の山　岫丸

（二〇才）

散初る桜はあすの名残かな　薩摩都城　登鯉

捨がたき身と思ひけり初桜　日向ミツ　吟竜

梅の花見てからよその夜明哉　壱岐　烏悦

万代や志賀のさくらに草の家　長門赤間関　羅風

やま吹にならむで煙る戸口かな　〃　冬蘿

峰の花眼を定れば星白し　芙山
見ては行／＼けり山ざくら　一蓑
夕ぐれを烏も啼ぬさくらかな　亀旭
畑打の空に日暮す小鳥哉　如玉
青柳に来てゐる雨の烏かな　甫雪
行雁は日／〻＼に水田の曇かな　蟻好
鶯に行とゞきたる日和かな　里夕
草の家の小ぐちに降や春の雪　枝江
灯のかゝるときちるさくら哉　其国

（二一オ）

ゆふ事も春はめでたし東やま　丶　庸々
山ぶきの色にもどるや朝の月　丶　松下
朝桜火を焚人の老にけり　丶　里柳
開作の後百年のさくらかな　丶　桃宇
いかさまに是は愛度桜かな　丶　古硯
鶯が啼とて橋を作るなり　丶　梅仙
遅ざくら雨の降日を盛りなり　丶　仙梨
烏までたゞ居る春の山辺哉　丶　憐霞

四国路や春の夜明の火が見ゆる　周防小郡　古梁
道草の匂ふや水のぬるみより　〃　和風
咲花にたすきかけたる坊主哉　〃　和竹
草も木も墨絵なりけり朧月　〃　一葉
梅のはなまだ裏道は溜り水　〃　喜謡
乙鳥の柳に来ては戻りけり　〃　和木
青柳に春を預けて行日哉　〃　古嵐
鶯や風かはしたる雨のはな　白松　古桂
くもる夜や水にも入ず啼蛙　〃　百之

（二二オ）

梅と家梅と家との山辺かな　　丶　　和道

月に咲月にちり行山ざくら　　山口　　雅倫

家づとや桜に結ぶ夢はなし　　上ノ関　　為充

山口の明た心やはつざくら　　安芸小方　　可友

　ことしは多賀庵の花守と成て

菜の花の白きも見たり麦の縁　　広島　　梅仏

あらし山今朝咲花をかぞへけり　　備前岡山　　子坤

山かげや二葉の麦にうめのはな　備中倉敷　五蓬
朝の柳おきよとたゝく庵かな　〃　甘蘿
山吹や夜のあらしに咲そろひ　京在福山　牛後
松風の上にくれたり鳳巾　〃　羽白
炉ふさぎや門に聞ゆる山の鐘　備後福山　重塊
犬までもつき来るものか花の山　〃　彫雲
ほろ／＼と花のちりけり雨の朝　〃　青枝
あらし吹浦もさくらの盛かな　〃　李朝

（二三オ）

松さくらいづれ夜明の姿かな　丶三原　素良
さくら咲軒やひさごのふと下り　丶　菊径
初ざくらよしありげなるこづきなり　丶　杜庵
はつ桜折れよといへば折過し　丶　士芝
ちる花に我笠重しよしのやま　丶　芝暁
鶯に何ぞいひ度寝ざめかな　丶田房　桃甫

鶯やあさ日のうつる小松ばら　美作高下　常戯
引よせて手折もやらず糸桜　丶　女　可度

（二三ウ）

あたら花に人は日頃の山路哉　　、文草改　瓠落

梟のつくねんとして花盛り　　播磨魚崎　石毛

花の山藤遅かれとおもふなり　　、姫路　頼木

美しき柳を貰ふ汐干哉　　、繁昌村　蛍渓

ちる花の須磨は夜に入浪の音　　、北条　梅廬

春の風少し小高き草もあり　　、魚崎　蘇明

今年の水のたまるから池　　木海

（二四才）

此家の息子の戻る二月にて　仝
　ひとつの笊の遣り所なき　明
いざよひをそこ／＼にして餅をつき　仝
　椋鳥場／＼へよせる笹の葉　海
江戸からもいふてぐしたる菊の事　仝
　草履たばこも翌日の賄ひ　明
付紐のあるきりものを記念とて　海
　めさきへ落る桐の木の花　明
鶏のけたゝましくも啼出し　海

わけのかはつた棟札をはる　明
山中に大釜すへる月の秋　海
得しれぬふねのかゝる露霜　明
きぬたうてお聞せ申はづかしさ　海
粥かきまはすわかれなりけり　明
枯〳〵の芒のそばの花咲て　海
蛙にそへるふみのはしくれ　明
夕霞ひとりもしつた顔はなし　仝
畠通しに出たる東金　海

（二五オ）

ねもごろに何やらかやら云ふくめ　明
　七日がうちは別の寝どころ　海
うたがひもなく盗まれし歌のさま　明
　使の人をよびかへす雪　海
松の木にふらりと縄をくゝりつけ　明
　ぽんとはねたる竹の燃際　海
鏡たて思ひの外にふるくなり　明
　田舎なれては月もわりなき　海
行秋にまた借かへる豆の代　明

（二五ウ）

禰宜がたつのを待かねし露　海
つる／＼とぬけかゝりたる腰のもの　明
門のながれに名をはね込　海
御遠忌をつとめる寺の夕あらし　明
はやほつこりと木の芽もへたつ　海
花の空きのふの傘を邪魔にして　明
鐘のなるとき猶おしむ春　執筆

夜明ればはるかになりぬ月と梅　伊予近井郷　五粒

みな花ぞ見下す三井の朝霞　丶三島　丹巵

あるが中に朽木目にたつさくら哉　淡路須本　起石

菜の花や問／＼歩行初瀬の山　小豆島　橘中

三日月の出れば春の柳かな　仝

霞はれて身はすて安き桜かな　讃岐仁尾　宗徳

漁火の夜半にしらけて朧月　丶　笑歩

はる雨や薪乾かす炉のほとり　洗耳
晴間なく雲沈みけり朝ざくら　机蝶
春雨や僧都の歌の流れよる　佳哉

ぬく〳〵と桃咲せけり小百姓　阿波　鳴雄

宇治はまだ何事もなき二月哉　三津人
晴天の声こぼしたる雲雀哉　佐保国
きさらぎや少しの野路も旅心　春来

（二七才）

柴の戸も明れば梅の匂ふなり　〃　吐雲
京ちかき気立も見えて花に鳥　〃　梅兮
初午や酔ぬ人まで薄月夜　〃　其尚
花の雲夜は水あぐる気色哉　〃　蕪状
海棠や毎日雨のかゝれかし　〃　春思
夕ぐれがひがん桜の盛り哉　〃　鵞雪
行はるや鳴ぬ田にしの物哀れ　〃　蜂友

三笠山のふもとにて

永き日をむさし野の原に忘れけり　〃　松月庵
月かげのはやかはりけり遅ざくら　尼ヶ崎　春人

松原や鐘も聞えて春の月　伊丹　比良
花の鳥葉になる頃も亦宿れ　池田　稲丸
散花のおしあふて行水の上　〃　ひとし
あかすぎて鳥の寝ぬやら花の宿　〃　李杏
夜ざくらや昼は世渡る人までも　たき山　鼓滝
行ごとよ夜明／＼の天津雁　兵庫　五趙
春雨を見に行宇治の川辺哉　河内かた野　古光
月ありて夜もさはがしきさくら哉　伊駒　耒耜

（二八オ）

鶯の口あけてまつ朝日かな　紀伊熊野渡浦　我青
薄月の田に影見えてなく蛙　紀伊高野山　僧　居石
雪どけの水すぢ見れば梅の花　〃　高野人

明くれを花に通ふか峰の雲　伊勢神戸　釈　無有
梅渓は寒い所なりおぼろ月　津　〃　彳松
あすは雨が降うとて散椿哉　〃　塩叟
昼中の鐘をかくして桜かな　山田　四渓
何事もみなわすれたり山ざくら　大塚　烏翠

（二八ウ）

風の柳やなぎの風に成にけり　伊勢上野　斯酉

こくうすくある日真白に春の山　伊賀上野　猪来

一度は花の機嫌を見てかへり　尾張名古屋　吟明

明る夜をまたでちらつく桜かな　〃　岸麿

朝霞みなよき連や東やま　参河新城　如岡

洗ふほどの水も来にけり若菜摘　矢作　和水

畠には桜さかせて隠居免　　相模荻野　東洞

独唸

夜桜や烏うかるゝ裏の山　　武蔵谷野皐月庵　悠々

軒ふる里の千金の春

夏ちかく薄着にうつる頃なれや

ぬぎおく笠に風そよぐなり

野は草の葉毎に露を結ぶ月

はるかに勇む駒ひきの声

（二九ウ）

家づとやことしの酒の呑ごゝろ
　かさははりても包みかろさよ
岩角へ落す筏を乗よけて
　わらぢの紐のとける折／＼
耳なれぬ仏法僧の声尊と
　梨子地の箱を児の携へ
霜寒き月に誰かは忍ぶ影
　うすものゝ香のもれるくだら野
すり違ひ群集なしたるはやり神

（三〇才）

七つにちかき日の廻りやう
律に聞笛のしらべも花の中
　へぎにのせたる草餅の色
誰やらん日永き部家に高鼾
　那智の住寺の入院にぎはし
楽書をはんじて見よととり／〻＼に
　化そこなふて関を通さぬ
啼水鶏はかる空音はなかりけり
　小田守賤があかりうす／＼

（三〇ウ）

叔父は今六条へんの出来分限
　ものいひごしは百になりても
思案する眉のほくろに皺をよせ
　緑青兀た辻の庚申
かいわいの角力にこぞる月の秋
　埒の陰より下る百　生（ママ）
椋鳥のわたる梢に透もなし
　閼伽汲もてる尼の年若
なき人の記念の筆をうすやうに

（三一オ）

傘の蛇の目はいともうつくし　近江在武州　亀使

白幣咲や神園の花曇　江戸　春蟻

ことのはことに結ぶ糸遊

鮒うりの来る夜もありぬ朧月　安房磯邑　楚流

春さめの処を得たり都鳥　〃　素月

花の山何れ下戸なく見えにけり

魂も飛来る花の日和かな

花に鳥みだるゝ時をさかり哉　雨銘
枝川やさくらかざせば水に蝶　〃　雪兄
暁の雲まだ寒し初ざくら　〃　雪弟
花に鳥こゝろの動く日和かな　〃　松寓
朝鍛冶のおとに余寒の残りけり　〃　一松

暖な月ひとつあり海の音　下総結城　眼斎
ひとしきり桜に早き夜明哉　〃　其章

（三二才）

蛙啼夜は雨もなし風もなし　常陸　曙雲
うるはしくみどり立けり竹の秋　〃　竹里

水際にあまる夜もあり春の月　陸奥南部五ノ戸　三豆
桜花おなじ春にも隔あり　〃津軽　文石
雨風の神にも申せ初ざくら　〃　仝
春の夜の雨は雨にて夜明けり　〃　桃仙
日ぐれても花のかげある小里哉　〃　里川
行々て瀬の音高しおぼろ月　〃鯵ヶ沢　子賀

手折人なきはいのちぞ松の花　〃　観水
羽子板のうらを見せけり春の雪　〃　除風
夕虹の裾引土手の柳かな　〃　里夕
鶯の真向に啼やかゞみ山　〃　子英
若草や雨に日落て陰二寸　〃　雨萩
朝空や濡る覚悟の山桜　〃　尾鏡

しら浪にしらむ磯山ざくら哉　〃　津軽　素純
家一ぱいに匂ふ甘海苔　千賀雄

鶯の小声に雨を呼出して　雄
　うちむかひ居る夕月の人　純
何となく草の花道静なる　仝
　余の秋しらず竹さらす里　雄
大鳥は来てもにごらぬ洞の水　仝
　羯磨が作のほとけなりとや　純
此度も売きらしたる忍ぶ摺　雄
　おもひかさなる暁の夢　純
炷しめし兜の香や薫るらん　雄

しぐれの中に秣きる音　純

甲斐が根にかたぶく月の影寒し　全

籠にならべる塩の小肴　雄

腰かけにねぶる座（ママ）当をおどろかし　純

日も陽炎も永き最中　雄

ちる花のおくへ〳〵と咲うつり　純

峰入前の米はこぶみち　雄

たゞくさによせて置たる鉈屑　全

兄も弟もこくめんな顔　純

（三四才）

隣からまたかりに来る塵劫記　純
　岩きり落す水はあら田へ　雄
甲かけの間まで蛙のはさまりて　仝
　女ぢからにあまる長櫃　純
明を待銀かはらけを汲ながし　仝
　いはれの多き朔日の式　雄
船にひく四手ちら〳〵と浅瀬川　仝
　荻ふみあらす菱くひの声　純
眼ざめてもさまでうごかぬ窓の月　雄

妻篭の宿の柚味噌なつかし　純

鼻紙を黄楊の小櫛のすべり落　仝

温泉のけぶりのほつ／＼と立　雄

にぎやかに珠数かけ鳩のあさるなり　純

やとひのものゝ銭わけて居る　仝

花の香に春の名残のおしまれて　雄

蝶に追るゝ岨の網はし　執筆

雲わけてやどる鳥あり夕桜　弘前比斗坊　其友

（三五才）

四方は皆さくらに尖る山もなし　〃七十九翁　乙彦
初さくら我にちる日の思ひあり　〃　素純
あり明の桜に鐘もおもしろし　〃　柳子
あら壁のかげろふ家や桜陰　〃　皓々
山ざくらやまにはなしはなかりけり　〃　文洲
さくらいろ／＼花は何さま山ざくら　〃　燕児
桜にも世は十分のねがひ哉　〃　五英
　おく富士のふもとにありて
月も雪も弥生は花の岩木山　近江在津軽　千賀雄
桜ほど花ちる花はなかりけり　津軽　五友

（三五ウ）

愚かなるこゝろも花の木陰哉　〃　呑鳥
花の山と呼ほど桜咲にけり　〃　雪江
花咲とおもへば春の夜も長し　〃　素涼
二三子と蛙聞く夜や雨静　〃　臨郷
村雨や西根よければ啼雲雀　〃石ノ巻　曰人
鶯の声の芽立や八重むぐら　〃伊達　為舟
菜の花や背戸一ぱいに日は残り　〃安達　鳥石
花の山あらき言葉もつかはれず　〃　恪花
雉子啼やなぐり捨たき古芒　〃二本松　乙調

月の戸や桜かざせし人は誰そ　上野沼田　山和
あさ日していとゞ余寒や川柳　上野小泉　幸内

ちる花にあはれをつくす小雨哉　甲斐　僧　乎之閑

いく千里煙立なり梅の花　飛騨八賀　素立

行雁のひとつは月に成にけり　信濃松本　可考
山ざくら月夜となれば風もなし　仝

梨の花麦のあらしと成にけり　仝
啼蛙明て雀の旭かな　伯先
行道のわきに成けり初ざくら　何頼

水かけがしても散出す桜かな　越後今町　なくに
月や日の余慶になりて梅の花　喜年
暮てくれず明ぬに明て桜哉　菊里
鳥の巣もけふはかくれて木の芽哉　里泰
梅が香や夕暮の窓引忘れ　探泉

（三七オ）

百姓の正月長し梅の花　柏崎　呉洋
雉子啼て広き野山と覚えたり　〃　其貞
世の中は今の事なり花に鳥　〃　平水

落着て物をくふなり遅ざくら　越中富山　方三
花びらのつよく見えけり瀧の梅　〃　如岡
赤椿大工の眺めつくしけり　〃　乙竹
面白き日に追るゝや春の雁　〃　烏休
柳見る日とては別になかりけり　〃　泗上

綿入の重きうら地や初ざくら　祖風
夕浪を見て啼春の千鳥哉　路月
月ひとつ遠くも見えて帰る雁　耳洋
草の戸の留主より揚る雲雀哉　魯鳥
ぬれかゝる霞の中の榎かな　二尺
梅が香に片顔寒き南かな　鯉有
松風や春の月さす桶の汐　嵐丈
見つけたる花に舟漕ぐ入江哉　窃窕
はるの夜の明れば花の曇り哉　孤山

（三八オ）

人里のはなれかげんを花見哉　　丶　周台
いたづらに里さるゝなり姥ざくら　　丶　文景
松風をうしろに置て初ざくら　　丶　太★（★羽共・一字に作字）
仮橋に松を根こぎやはな盛　　丶　魯山
今朝も見て昼も亦見て夕ざくら　　丶四方　支山
おれぐちの扨あたらしき初桜　　丶高岡　内海
つまだてゝ小坊子歩行藤の花　　丶　花農
馬駕に水はとゞくぞはつ乙鳥　　丶関野　真葛

（三八ウ）

初ざくら白き小袖の寒きかな　能登黒登（ママ）　玻井

此上に鳥も啼なり瀧の花　〃　加由

ちかき比焼しすぐろがなつかしき　〃　寒厓

鶯のおのがこだまに逃にけり　加賀槐庵　雪雄

高からぬ籬のさくら咲にけり　〃　一抄

乙鳥や今朝より聞ぬ海の音　〃　蘭史

世に住ばひばりの野辺も見たりけり　〃　棹江

雪なだれゆるき嵐と成にけり　〃　階涼

あたゝかや水にはびこる草の色　　〃　素羽
露けしや臥猪の床のつぼ菫　　〃　文渓
鶯の寝に来る声ぞうつくしき　　〃　霜屋
人声にさそひ出したり雉子の声　　〃　三京
入川の向ふになりて梅の花　　〃　蘭吹
等閑にみゆる柳の朝戸かな　　〃　高松
鶯に赤き日のさす野山かな　　〃　自明
梅の咲日がらあかるし竹の奥　　〃　富扇
春もはや高い所にうめの花　　〃　蘭堂
　　〃　北台

（三九ウ）

雨の日やさくらにけぶる岡の家　丶粟ヶ崎　稲梁
山吹に門二つ見る醍醐かな　丶園亭　鹿古
鳴の啼夕ぐれに似て焼野哉　丶暮柳舎　車大

石臼の挽木倒れて春寒し　越前丸岡　甫立

春の霜桜に消えて仕廻けり　若狭向笠　貫巵
種蒔て見れば月ある夕べ哉　丶北前川　寿ト
竹の葉の流れて交る小鮎哉　丶田井　牛戻

啼蛙うつり心のひよりかな　、生倉　節之
河こせば河内の蝶と成にけり　、成出　六英
海士の火の淋しくもえて春の月　、　北洋
静なる夜明のさまやはるの雨　、高塚邑　千好
朧気をはなれて高し梨の花　、神子浦　柳滸
やまぶきの井手に狭まる戸口哉　、　佳玉
子の世話にやつれの見える燕哉　、食見　花雪
梅暮るあたりの薺聞えけり　、敦賀　仙草
眠たさの春もつとめて朝桜　、小浜　李兮

天晴れの大木なりけり花曇　近江水口　蜃州
花ちりて春是までと思はるゝ　〃　其友
三尺に花の過さる夜のやま　〃　砂上
初桜あれと見おろす峠かな　〃　平松　亞渓
我ながら我はづかしや花吹雪　〃　女　しう
出る時の心ではなし夕ざくら　〃　日野　松蘿
花に遊ぶ心に我も人もなし　〃　紫英
夜の柳しほるばかりに闇き哉　〃　サツマ　如蒿

（四一オ）

鶯の価の外や買屋敷　濮水
花によを一ト日なげうつ山路哉　紅枝
何所とても花にまばゆき梢哉　如行
きのふから散る花に来て啼烏　如風
大寺の掃かけてある春日哉　蘭之
山まるで春に成けり落し角　芳之
日枝三上おなじ夜明て飛胡蝶　柏翠
初花はちりて桜のはやし哉　素人
初花にさはらぬ春の寒さ哉　獅丸

しばらくの雨もうれしき桜哉　　湖夕
出来上る鐘や浮世の花の中　　乙鶴
白梅の中より出たりはしご売　　子諒
家ざくら夜に入る雨のふとり哉　　万木
つか／＼と見による庭の菫かな　　鷺泊
松風におされて出たり春の月　　北嶺
岩橋の夜は明にけり花に鳥　　素雁
京人が見て／＼散す桜かな　　砂文
草餅やけふもわかるゝ雁の声　　寵山
　　田美

（四二オ）

飴売も搗屋も春の隣かな　　、大溝　青楓
松山の夜にもまぎれぬさくら哉　　、　一居
油火のまことらしげやちる桜　　、　無禁
麦よりは一段高し花のかげ　　、　松雫
目のうちは何ともいはぬ桜哉　　、　阿石
けふの日も花にとらるゝ曇哉　　、堅田　歌雄
音のして散る花も見る山の寺　　、　籬邑
白藤に春のかくるゝ山辺哉　　、　几頂
雀らも声ありたけに霞けり　　、　友鹿

浦家めくものは柳の朝日哉　五粒
人馴れし雁の名残よ八幡山　其白
霞む日やどこに巣を持鳥の声　巵当
淀川や鶴のたつにも春の風　美山
青柳やしつたりぬるゝ夜の雨　有常
朝雨は寒みもつなりうめの花　子兮
陽炎や野辺には野辺に啼鳥　湖月
明行や川浪そゝぐ初ざくら　文常
世の中や咲ばちり行山ざくら　坂本于当

（四三才）

桜よりあらはれにけり朝ちどり　丶三井　千影
大空のながめられけり花の雨　丶大津　五来
雀子や筧の水に下りて来る　丶　宇洋
ちるも花咲も花なり雨の中　丶走井　烏頂

樋の口のあかはたまりて柳哉　山城宇治　泰峨
啼鳥は啼て桜の夜明哉　　馬州
船造る苫屋に昼のさくら哉　丶　恕裕
畠から春も立ぞよ雉子の声　丶三室　幹海

柴漬の一枝はねて木の芽哉　　丶淀　蓬室

苗代や水のいそがぬ青みより　　丶伏見　可蝶

あたゝかに土の匂ひや車道　　仝

ふみわけし麓の花ぞまさりける　　丶在京讃高松　履視

花守の四十を恋のはじめ哉　　丶信上田　六轡

うつゝなや世上の花の朧かげ　　丶奥二本松　二松

みよし野と思へばちるや我桜　　山科　木渓

（四四才）

愛宕から丹波へ越しぬ桜がり　京　斗雪
家ありてつゝがなく咲野梅哉　〃　漢水
くるゝ日やさくらに戻る花の色　〃　あたふ
たぐひなき寺の名となる椿哉　〃　春山
花咲て酒ある嵯峨の家毎哉　〃　馬遊
あかるきは水の常なり遅ざくら　〃　其白
よけて吹け花にはにくき夕嵐　〃　一態

長楽寺にて

さはがしき時はきにけり夕ざくら　〃　茂良
何となふ流るゝ水や春の月　〃　以鳴

遅々としてあたら日暮る桜哉　白朗
ちる花や世の鐘遠く日のくるゝ　魯渕
日和にはあかぬ物なり藤の花　泉立
何所までもうらなき花の盛哉　芦涯
暮行や畠の中のもゝの花　桃江
うぐひすに引れて入りぬ二尊院　魯竹
夕日さす彼岸桜やうしろ堂　起龍
梨の花朧月夜に戻りけり　涸轍
きのふ見し人も居るなり花の山　酔夫

（四五才）

草の風間もなくくれて朧月　　丶　知大
西風に日直るそらやはな曇　　丶　春峰
何心付ぬところやすみれ草　　丶　季謙
留守の戸を叩て過ぬ初桜　　丶　芹水
越路には神代のまゝの春の雪　　丶　南岳
初花やまだかけ替ぬ去年の橋　　丶　杖下
人声や霞の中の山ざくら　　丶　橘栄
西山の茶はなまぬるきさくら哉　　丶　千代道
土器をかさねる花の垣根哉　　丶　凡仲

わか／＼と今年も花に立双ぶ　丶　松屋
虎杖や蕨の春と成にけり　丶　東子
横雲のきれ残りけり峰の花　丶　蓮儕坊
我宿は豆腐ばかりの桜かな　丶　吐成
したゝかに折て囉ふや山ざくら　丶　鶴翁
三条に先宿をかる桜かな　丶　兎角
桜から押出す雲のかしら哉　丶　百麿
はや露も見えて木陰の落椿　丶　国雄
初花やしらぬ小宮も伏拝み　丶　阿年

（四六才）

朝雲に気のつく桐の木の芽哉　丶　葦笠
ちる花に時も聞えず鐘が崎　丶　岱李
老けりな藪の中なる桜花　丶　荷屋
年々に心さびしき桜かな　丶　仏斎
日毎／＼花の八重山人諷ふ　丶　桃李
山ざくらこゝらも志賀の郡哉　丶　在貫
白魚やゑの子柳のかげこゆる　丶　居然
小十町汐引捨て春の雨　丶　百池
さくら咲と聞さへはやき山路哉　丶　千崖

（四六ウ）

松山のこなたに昼の桜かな　蒼虬

追加

芹川や蛙子あまりいかいこと　東武

散ぎはや一日梅のさはがしき　芹斎

いくたりの人の遊ぶや山ざくら　在京筑後

美しき夜となる浦の弥生かな　天籟

砥にならぬ石とてはなし藤の花　丹州八上

つつと出る日にあまりけり雉子の声　玄之

明かゝるところは花の山路かな　西湖舟木

〃　鸞尾

〃　鳰人

〃　肥長崎

〃　禾径

〃　路喬

春の雪処／＼に見ゆるなり　丶　其政
さし柳五尺の春と成にけり　洛西　不染
さくら狩鰒喰た人も交りぬる　洛　有国
松立て世を小車の初め哉　洛北修学院　三朝
八重一重霞める中や花の寺　在京西濃州多良　三好
うす雲のゐなをる方や花盛リ　京　羅石

京都烏丸下立売上
書林　橘栄堂勝田善助

（裏表紙見返し）

（裏表紙）